

# 森とともに生きて



## 森の達人、辻谷達雄さんに聞く

その1 吉野林業の実際



辻谷達雄さん

川上村在住の林業家、辻谷達雄さんは81歳の高齢である。山の自然の素晴らしさや山仕事について伝えたいことが山ほどあり、その思いは年を経ることに強くなっているとのこと。2002年から2011年まで川上村において「森と水の源流館」の館長として活動を続けられてきた。特に都市部の人たちに毎月1度、野外活動を通じて山の素晴らしさを体験してもらおう「達ちゃんクラブ」では、多くの参加者が山の暮らしを学んだ。これらの活動に対して、2009年には国土緑化推進機構が認定している「森の名手・名人」に選ばれた。また、辻谷さんの活動は広く紹介され、最近では、毎日新聞奈良版に「木の文明と水源」をテーマに掲載されたそうだ。

### 吉野林業とは

500年前、室町時代に川上村で植林が始まった。これが吉野林業の始まりでもある。川上村の人工林には樹齢400年の木が今も残っている。現在でも村の面積の95%が山林で、その80%が人工林である。

明治期に入って、吉野林業の中興の祖と呼ばれる土倉庄三郎が山仕事の基礎を築いた。彼が監修した『吉野林業全書』は、今でも造林のバイブルとして受け継がれている。吉野林業の特徴として、まず「山守制度」があげられる。



下草刈り

は1年でそれより高く伸びるので、草に囲まれてむせ枯れてしまえば日光も当らなくなる。そこで、6月から9月にかけて二度の草刈りを3年ほど続ける。4年目から7年目にかけて年1回、8年目からはつる切り（クズ等の木に巻きつくつる植物は幹に食い込んで木の生長を止めてしまうため）を行う。刈った草は木の肥料になる。

その次が枝打ち。10年目頃から地上1〜1.5メートルまでの細い枝を落として風通しをよくする（「ひも打ち」という）と同時に生長の悪い木や曲がった木を除伐する。その後はヒノキを主として、本当にいい木を育てようとするれば、植え付け後



枝打ち



間伐

江戸末期に始まった「借地林業制度」が、この制度の前身である。交通の便利な地方に比べ木材生産の利益が低く、また長伐期施業が特徴の吉野では、山林所有者が衣・食の生活維持も困難となり、自らの生活を守るため山林を村外の資本家に貸すようになった。山の所有権と使用収益権（地上権）を分離し、地上権を資本家に譲渡する仕組みである。地上権の設定方法としては、主に「立木一代限り」が一般的であった。

この制度が発達して次第に村外資本家が山林を所有するようになり、村内住民が山守として山林の保護管理を受託した。これが山守制度だ。山守の職務は山林の保護管理から植栽、手入れ、間伐等の労務及び資材の調達、労務者の指揮管理まで及ぶ。辻谷さんは、親戚の山守の家で山行（山林労働者）として働いていた。従来方式を学ぶ中で辻谷さんが編み

数年から始めて20〜35年間、必要に応じて枝打ちをする。枝打ちは木の生長を制御して年輪を詰めたり、周りの木を圧迫しない効果があり、材にしたときに節が出ないので材の値段が上がる。

打ち方も熟練がいる。うまく断面をえぐるように枝を落とさないと、傷口がなかなかふさがらない。切り口が5円玉のように見えるのがよい打ち方である。また、どの枝までを落とすのか見極めるのも経験がいる。ただし、枝打ちは本来ヒノキだけでスギは行わない。スギは下の枝が自然に枯れて落ちる（「自然落枝」という）。

### 収穫と出材の工夫

植え付け後14〜15年で間伐が始まる。これには、保育間伐と収入間伐があり、前者は切り捨て、残った木の生長を促すために行い除伐ともいう。後者の収入間伐は、保育の効果もあるが切った木もお金になっ

出した作業内容は、以下である。

### 林業の基本は育林

まず伐採した山地に農業同様に土地を拵える。伐採時に切り落とした枝葉や雑木を3メートル程の間隔で等高線に沿って積み上げていく。皆伐された山の斜面に縞模様を描いたように見えるのがこれである。秋から冬にかけての仕事である。

山に植える苗は、畑に種（木に登って取る）を播き、2〜3年育てる（吉野ではこの実生苗を使う。全国的にはさし木苗が一般的）。大量の苗を植えるので、除草剤のない時代は草引きが大変だった。

春分の頃、スギやヒノキを植える場所を選定（適地適木）し植え付けをする。吉野では「ひとクワ植え」といって、クワを地面にグサツとさして起こした際の隙間に、背負っているザックから抜いた苗を差し込む



主伐

た。ただし最近では、よほどの樹齢でないと収入にはならない。昔であれば、10年前後の木は建築現場の足場丸太や稲を干す竿などの利用価値があった。

最後に主伐。これはその林地の木を全部収穫することであるが、吉野なら100年から120年後の仕事、なかには200年、300年を超える人工林もある。他の林地であれば、せいぜい50〜60年、なかには30年を伐期とするところもあるようだ。以前宮崎県の樹齢40年の材と比較した時、吉野の樹齢80年と同じ太さであった。

最近伐期が伸びる傾向にあり、複層林施業（樹齢の違う木を混ぜて育てる森づくりのこと）が目立って出している。

半世紀前までは、伐採後すぐに材しなかつたため、皮剥きや葉枯らしの工程があった。スギは皮を剥いて4〜5か月山に置く。すると芯材



山に苗を植える

方法で行っている。その苗を1ヘクタール当たり1万本前後植える。最近8千本ほどに減ってきているが、全国的には3千本ほどだからそれでも2倍以上の本数である。こうすると、年輪の詰まった木が育つほか、根元から梢まであまり太さが変わらなくて真っ直ぐな幹になるなど、いろいろな効用がいわれている。その代わり、間伐など世話も密に行わないと育たないし、長伐期になる。これが高級な吉野材の元だ。

次が下刈り（下草刈り）。苗木を植えた山の草を刈る仕事である。苗木の高さは30〜50センチまでで、草

【注】修羅とは、材木を並べてその上を滑らせて伐材を一か所に集める手法。